

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和五十七年四月十五日 發行 (毎月一回・十五日發行)

(通第三九三号)

# 慈

# 光

第三十四卷

第四号

## 目次

煩悶の下に光明あり……………	近角常観……………	(1)
盲人が盲人のまんま救われる……………	安波動八……………	(5)
大悲無倦……………	井上善右エ門……………	(9)
凡骨日誌抄(12)……………	西元宗助……………	(12)
生命への畏敬……………	川畑愛義……………	(14)
中国残留孤児と貿易摩擦……………	山田宰……………	(16)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(18)
法味その折りく……………	花田正夫……………	(21)



# 煩悶の下に光明あり

近 角 常 観

吾人が切に現代思潮のために煩悶したまえる人に向つて警告せんと欲することは、煩悶の下に光明あり、即ち今その脚下に樂地ありということである。

華嚴の滝に投じ、阿蘇の噴火口に投ずる人は、今やまさに大安慰を得べき實際まできていながら、自ら身を水泡に帰せしめ、生きながら心を火炎の中に入るものである。

未だ光を見出さぬ間の所作で、致し方もなきことなるも、徒らに虚飾と浅慮とを發表して人の笑いを買うのみならず、全体死後の境界につき如何に考へつつあるのであろう。勿論その志の憐れむべきは察するにあまりあるも、如何程煩悶におちいればとて自ら死を招くというは宗教の説きつつある来世苦樂の境につきて一顧せぬもので、その所作は古聖賢に対する一大侮蔑である。絶対の救済に対する根本的罪悪である。

吾人は世の煩悶して空しく身を亡ぼす人に向つて警告する。仏陀の光明はまさに諸君の上を照らしつつあるのであ

陀の御力にまかせ奉つてこそ安心することが出来るのである。我等が仏陀を手段として煩悶を去らんとしようとな横着・驕慢な考では信仰に入ることは出来ぬ。

次に吾人は道を求めるために煩悶している人に向つて警告する。われはこれ程までに求めているに光の来らぬは残念であるとは思つておらぬか。道すじは解っているが実感の伴わぬには困ると思つておられぬか。全体我は求めていると思つているのがあやまりである。すでに仏陀が我等を求め、我等を喚びたまうのである。それなのに自分で求めつつあると思つている人は自分で通れつつあるのである。

又道すじがわかつていると思つているのがあやまりである。実は少しも解つて居らぬのである。全体仏の恵みは解つて喜ぶのではない、恵みを喜んで疑うことの出来ぬのが信じたのである、明らかになつたのである。

そもそも我等が大いに喜んではじめに仏陀があるように考へるのが間違ひである。我等が喜ぶも喜ばぬも、気がつきても、気がつかずとも、たとい仏にそむくとも、なお仏陀は我等をあわれみ、悲しみ、愛し、いつくしみたまいつつある。我等はかくの如き仏陀に對してみれば、我等より求めずして、光明おのずから来り「何事のおわしますかは知らねども、ただありがたさに涙こぼれる」と感泣し奉る

る。すべからく一刻も早く仰いでこれに安んずべし、もし直ちにこれに安んずること出来ずとも、必ず救済にあずかることはすこしも疑なきことなれば、たとい如何なる境遇にあるとも、心をくじかず最終に暁の明星の輝くときまで待たなければならぬ、吾人の切なる忠告は「直に光を仰げ、仰ぐこと出来ねば待て」ということである。

なお一歩進めて煩悶を解かんがために道を求めつつある人にむかつて警告する。

そもそも宗教を煩悶を解く手段と考へておらぬか。信仰ということをお己を安んずる道具と考へておらぬか、仏陀をわが煩悶をぬぐいさるべき雑巾の様に考へておるのでないか。

全体仏陀は恵みの親であり、生命である。我々は全身を投じておまかせするのである。その足下に感泣するのである。我々は生殺与奪いかようともしのお心にまかせ奉つて、あだかも慈母のふところに抱かれた如くである、我等は仏

のほかはないのである。

この如く仏陀の御恵みが我等の胸中に届きたるが即ち口にあふれ出でて南無阿弥陀仏となるのである。これ実に過去の日本において、源平時代の煩悶を一掃して、鎌倉時代の清廓なる一世を昭らしたまいし光明である。法然聖人が

南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本

という一大法幢は当時の心靈界の中心である。上下、貴賤・文武・僧俗みなその獅子吼の下に雲の如く集り来りたるのである。花のさかりの敦盛を討ちて無常を感じた阪東武者の熊谷直実も馳せて聖人の門下に剃髪出家したのである。東大寺の大仏を焼討にして聖武・光明の両聖の偉觀を兵燹にまかしたる平家の落武者、重衡卿も書を以て聖人に道を求め安心して断首せられたのである。なお山賊、海賊、強盜放火、殺害を極めた津の國の耳四郎も、のきの下に聖人の教を聞きて遂に改悔懺悔し、一世の達人、人臣の至極たる関白兼実公も冠を傾けて聖人の法縁に感涙随喜せられたのである。

実に南無阿弥陀仏の名号は、一切衆生があこがれる大慈の父の御名である、一切衆生が安んずる大悲の母の御懷である、一切衆生の兄弟が護持養育をこうむれる親切あふるる乳母の乳房である。誰かこの念仏のもとに全身を投じて渴仰せざる者があろうか。当時温厚博識できこえた聖覚法



印も、從順如法の信空上人も、聖人の門下に安心を見出されたのである。しかして同じく聖人の選択本願の念仏の御教を聞いて敬虔の念を以て満たされ、信心観喜せられた親鸞聖人の胸中、南無阿彌陀仏、往生之業、念仏為本の一つで見たされたのである。歎異抄の二章に

しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法門等をも知りたるらんところにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり云々。親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。たとい法然聖人にすかさされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。

この如く全身をあげて如来の光明中に投じてみれば、何んか心を安んぜざる者がある。仏陀の御恵みの下に、智愚の区別もなく、境遇の善悪もない、大慈悲に対しては吾人は一点の私をさしはさむべき余地を見出さない、何ぞ自ら求めて苦しみ、いたずらに小智浅慮をめぐらして、煩悶懊惱せん。いわんや身を水火の中に投ぜんとするが如きは、万代の光明たる古聖賢に対する侮蔑たるのみならず、大慈大悲の如来の悲憫救済に対して実に申しわけないことである。そもそも人の煩悶は自己の境遇の善悪につき、倫理行為の善悪につき、人情につき、信念につき、万事についてこの

をひるがえして、如来の御心に融和して同一鹹味の信仰となるのである。ここに至って煩悶懊惱もあだかも宿夢のように消えるのである。そして眼底にかがやき来るものは盡十方無碍の光明である。

「煩悶の下に光明あり」  
この一語をもって、幾多の煩悶者に警告する次第である。吾人は決して煩悶をよしみするものではない。無碍の光明は一切衆生の上に光被して如何なる煩悶をも昭らし破るといふことを断言して警告するのである。

すべからく、今その光明を仰げ、すぐ仰ぐあたわずんば、自らその光明の来る時を待て。世の煩悶者がかくの如き仏陀の救済あることを知らずに、むざ／＼死を急ぐを見て断腸のおもいたえぬ。こいねがわくば同心の人々とともにせめてこれらの人にこの大安慰のあることだけなりと知ってもらって、その光明の暁の来るを待たせたいものである。

〇〇〇〇〇

今それすて 源通寺老住手記

一、今迄生れられるような心にならねば生れられぬと思ひし故、直に計らいまわる。この心、今それすて、超世の大願こそはこの私のために御成就ぞと聞きひらかるる

善悪をはからうのであるが、吾人はこの如き絶対の大慈大悲に対しては、このはからいは無用である。

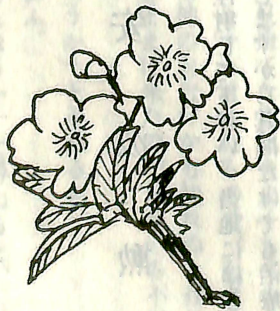
まことに如来の御恩ということをは沙汰なくして、我もひともしあしということのみ申し合えり。聖人の仰せには善悪のふたつ総じても存知せざるなり。その故は如来の御心によしとおぼしめすほどに知りとおしたらばこそよきを知りたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどに知りとおしたらばこそ悪しきを知りたるにてもあらめど、凡悩具足の凡夫、火宅無情の世界はみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますことこそ仰せ候いしか。と歎異抄の総結文にあるが、そもそも善し、悪しの沙汰をするのは煩悩具足の身をもって善くすると考ふるからである。火宅無情の世界に居ながら悪しきをやめ得ると考ふるからである。

全体人間は罪悪のかたまりである。世界は泡沫の夢である。絶対の闇黒、絶対の迷盲、絶対の虚妄である。ひとりこの間を照らし給う絶対の光明、絶対の真実、絶対の清浄は仏陀である。吾人はすべてのはからいをなげうって、如来の慈悲海中に投入すべきである。ここにいたって如何なる境遇も、如何なる理想も、如何なる倫理的標準も、人生的欲望も、野心も真面目も、いずれも人間的の小さな立場

ば、仏智の御与えにて、かかる胸へ六字賜わりて、往生一定の身となるなり。

二、とかく、喜ばれぬの、疑いはれかねるに貪着して、しみ／＼御恩を喜ばれぬ。その心で百年聞いても疑いのはるる道理はない。その計らい、今それすて、超世の大願は如何なる機の衆生を助け給うぞ、いか様に立て給う本願ぞと、その本をよく聞かねばならぬ。

三、地獄覚悟で聞く気はなくとも、どうでもこうでも、我が浄土へ生れさせずばと思召す如来の大慈なれば、一日に八億四千も心がうつりかわり、悪のみ造る身なれども、弥陀の名号は利剣故きり給う。





# 盲人が盲人のまんま救われる

安波勲 八

(大正十三年)

「昨年五月頃、四十二三の男の患者が六十余りのお母さんへ手を引かれて診を受けに来た。一方の眼は全く明暗を辨せず、一方は唯かすかに光が入るだけである。

「種々手を盡したけれども経過がよくない。何とか治る方法はないでしょうか。福岡の大学病院でこんな処方を買って来ました」

暗室でよく検べて見ると、両眼共視神経アトロヒーで乳頭は真白になっている。一方瞳孔反応がかすかに残っている。

「一方は無論駄目である。他方も何分病気がむづかしいから、こうやればよくなるという方法はない。病気の性はよくわかつているから何とかしてみようと云えばこめかみに注射でもし、大学病院の処法の通りに服薬し、すりこみでもするのです」

「注射は毒になりませんか」

「毒にはならぬ」

「実際お気の毒な身体になった。然し世の中は貴方よりまだ不幸な人がある。貴方はよくなりさえすればいくらでもお金をかけられるのであるけれども、世の中にはよくなる病気を持つていながら、お金のない為によくならぬ人達がいる。そんな方にくらべると、貴方はまだ仕合せです」と

理屈を言うて暗室に入った。然し「なさない身体になったものですね。いくらお金をかけてもよくならぬのですか」

「眼医者であっても眼をよくし得ないことは、なさないことです。私は貴方の眼を見えるようにすることは出来ません。然し貴方は眼が見えぬことの外に、その為の心の問題で悩んでおられるようである。心の持ち方に就いて何とか御相談しましょう。昼間は忙しいから御都合がよかつたら夜間お話しに来てくれませんか」

「それでは夜分よせて頂きましょう」といってその日は何も治療を受けずに帰った。

その晩お母さんと共に訪ねて来られ、お母さんは座につくや否や、

「私は真宗の信者です。迷うことは嫌いでありますけれども子供の眼をよくしたい許りに随分迷いました」と冒頭して次の療病苦心談をした。

「毒にならぬならば注射して下さい。当地にはどうしても尚二ヶ月ばかり滞在しますから其間だけでも治療して下さい。」

そこでストリヒニンをこめかみ部皮下に注射し、翌々日又来るように申して帰した。

勿論治療によって回復の望みは全くなかったのであるけれども、患者は唯よくなることを望み、よくなることの為には如何なる犠牲をも払おうという態度を見ては其時お前の眼は到底駄目だとそのままを云うに忍びなかつた。

約束の如く翌々日やって来た。

「先生、私の眼はこうやって注射をして貰い飲み薬を吞んでいると、よくなることはよくなるのですか」

「それがよくなると云えんのじゃ。唯何とかしてみよと云えばこうするだけのことだ」

「なさない身体になったものですね。幾何お金をかけてもよくならぬのですか」

一年程前、急に一方の眼が悪くなり、直ぐに郷里伊予宇和島の眼科専門の医院に入院加療したが、間もなく他方も悪くなり、病勢は日に日につのるばかり、これではいかぬと思つてゐる処に、或人に勧められて土佐の山奥に弘法様の修業する処がある。そこにおこもりしてお祈りをしたけれども、病気は相変らずどしどし悪くなるばかり。三ヶ月位で其処を辞し、福岡の大学病院に入院加療を受けることになった。福岡ではこれ以上見え方のよくなることは難かしいが、病気の進行は止めてやると言われ、服薬、注射、スリコミなど種々試みてくれたが、病勢は相変らずつものばかり、どうせ見込がないならば帰りたいと願つたところ前記の処方箋をくれて帰つて養生せよとの事で、比処も入院約三ヶ月にして郷里宇和島に帰ることになった。帰途当地別府に立寄り、竹瓦湯泉に入浴中、隣りに居た男が病気に同情せられ、「医者の見捨てた病気をよくしてやる所があるが貴方は行つてみぬか」と言はれるので、医者の見捨てた病気をよくするとは神のお告げかも知れぬと存じて、その男のすすめられるままに來たのが只今いる不老町の灸をすえる所である。

「眼はよくなるでしょうか」と尋ねると、

「必ずよくなる」と云ふ。

「幾日位でよくなるでしょうか」と尋ねると、



「幾日でもよくなるかは言えぬが、こうして毎日灸をすえて居れば必ずよくなる」

「そこでその家に入り込んで毎日治療を受けることになり既に約三ヶ月になるが眼は相変わらず悪くなるばかり。」

しかる所に野口の或人が「安波に行つて診て貰わぬか。あそこはよくなるものはよくなる、よくならぬものはよくならぬと教えてくれる。決してうそを言わぬ人だから、とにかく一応診察を受けて意見を聞いたが宜しかろう」というので当院に來たわけである。

私は此物語りを聞いて、如何に患者が明を求むる心が熾烈であるか、又医学が現今よくならぬ病氣に對して如何に無力であるのに、子供の眼を治さんと土佐から福岡別府へと、迷ひ歩く親心の有難さに感泣した。

「今更となつて気休めは申しません。貴方の眼はお氣の毒ながらどんなことをしてもよくなりません。それに医療でよくなつても御祈禱でよくなつても、灸をすえてよくなつても如何なる方法によつても治りさえすればよいのであるが、貴方の眼は医療によつても祈禱によつても灸によつても、如何なる方法を尽くしてもよくならぬのだ。今まで何とかしたらよくなるかも知れぬと、よくなることに一点の望みのある間はお母さんに対して不平許りであつたでしょう。どうしてこんな悪くなる目を持たせてくれたであらう。今

「いや／＼私は決して灸をすえるのをお止めなさいと申すのではありません。貴方のお心持としては、よくなるといふことは何でもやつてみたいと思つてしよう。それは当然です。然し如何なることをしても決してよくならぬということが分ると、このよくならぬ眼を持つている者を相変わらず相手にし、貴方の将来を御心配下されるお母さんのお慈悲の有難いのが分かるではありませんかと申すだけです。決して治療を止めてお帰りなさいと申すのではありません」とお答えすると、

「否よく分りました。もう決して迷いません」と云つて、患者の顔には淋しき喜びをさへ認めた。

この光景を見て、お母さんは甚だ喜ばれ、  
「先生から子供の眼がよくなると言われたよりは嬉しい。」  
何たる力強い言葉であらう。常識ではちよつと考えられぬ。眼がよくならぬといわれて嬉しい筈はないのであるがそのことよつて初めて親のお慈悲に氣付き、仏のお慈悲に眼がさめ心の開けた有様を見ては、なるほどお母さんの言葉が出る筈である。

親は既に既に子供の眼のよくならぬことを知っている。決して迷つてはおらぬ。然し子供が何とかしてよくなりたといと、この心の煩悶がとけぬものから、子供と共に迷つたが、いま子供が親心、仏心に氣付かれ、胸が開けた時が即

しばらく福岡で治療を受けたいと思つたが母が帰ろうと云うので帰つたとか、種々母に對して不平ばかりであつたでしょうが、如何なることをしても決してよくならぬことがはつきり分ると、此のよくならぬ眼を持つている子供の為に四国から福岡、福岡から別府に迷ひ、いよ／＼よくならぬばこの不自由なる盲人の為に、不自由のない様に暮される方法を講じてやろうとして下さる、此処にいる貴方のお母さんのお慈悲の有難いのが分るではありませんか。私共は善いことをしたい、愚痴を止めたいと思ひ、何とかしたら本當の善いことが出来る様に思ひ、愚痴が止む様に思つている間は、本當のよいことの出来ない、愚痴のやまぬこの私を相変らずお相手下さる仏様のお慈悲が分らぬが、如何なることをしても本當の善は出来ぬ、愚痴は絶對に止まぬということがはつきり分ると、かような善いことの出来ぬ、愚痴の止まぬこの私を變りなくお相手下さる仏様のお慈悲が有難くはありませんか」と其時の私の感想を述べたところ、

患者なる息子さんは意外にも、  
「あ、そうでしたか、有難う御座いました。お蔭で胸が開けました。よくなりましたばかりで、親のお慈悲に氣がつかなくなつた。あ、そうでしたか、私はもう灸をすえるのを止めて、國に帰ります。もう決して迷いません」

ち親の胸の開けた時である。そこで「治るといわれたより嬉しい」というお言葉が出たのである。

「十方衆生の往生成就せしとき仏も正覚を成る故に、仏の正覚成りしと吾等が往生の成就せしとは同時なり。仏の方よりは往生を成せしかども衆生がこの理を知ること不同なれば、已に往生する人もあり。今往生すべき人もあり」安心決定鈔の御文が味わわれる。

親心が届いてみれば眼はよくならぬまんま救われる。其後一週間許りして郷里の宇和島から葉書が來た。「お蔭で慈悲を喜ばして貰つています。何にも迷わずにいるから安心して下さい」とした、めであつた。

翌年二月二十二日、恩師東陽和上葬儀の日また葉書が來た。眼は見えぬけれども仏法は信仰していますから喜んで下さい云々とした、めでた。

眼の見えぬものが眼の見えぬまんま救われることは信仰の特権である。医学は此問題に一指をも染めることは出来ぬ。然るに医者は實際によくならぬ病人をあづかつて居る故に病人の絶對的救済と云う立場からも医者は信仰の何もかを休得する必要はないだらうか。

大正十五年五月二十七日稿



# 大悲無倦

井上善右工門

齒科医のところでごんな出来事に出遇いました。三、四才の児が母親に伴れられて来ているのです。齒が痛むのでしよう目を泣きはらしています。母に抱れて治療室に入ります。

醫師がさあ治療にとりかゝろうと器具を手にして前に立つと、今まで泣いていた児が口をムツと結んでどうしても開かぬ。「坊やお利口だからアーンして」と母と先生一生懸命ですが、なだめようが、すかそうが、頑として應じない。先生やむなく二、三步さがると、ワーツと泣き出す。今ぞと近づくとムツとふさぐ、どうにも施す術がない。母親がこんどは泣き出しそうです。二、三回こんな事を繰返して、とうとう断念して引退る。そして悲痛な面持ちでこう語るのです。「これで二度目なのですが、またこの通りです。それで伴れて帰ると痛い／＼と泣き続けます。どうしたらよいのでしょうか。私の育て方が悪いのでしょうか……」と。如何にも困ることだろう、してみようがなかる

われわれはそれ／＼に業を背負うています。その業の故に執我の殻に閉され、私の真実心を遮断しつけているのですが、大悲は無倦にその執我の砦を抱き取り、光明をこの私に送りとゞけて下さいます。その御苦勞の如何に深重なることでしょうか。

「安心決定抄」の言葉が思い浮かびます「わが力も悟りもいらぬ他力の願行を欠しく身にたもちながら、由なき自力の執心にほだされて、空しく流転の故郷に還らんこと、返す／＼も悲しがるべきことなり、釈尊もいかばかりか往來八千返の甲斐なきことを哀れみ、弥陀もいかばかりか難化能化のしるしなきことを悲しみたまふらん、若し一人なりとも、かゝる不思議の願行を信することあらば真に仏恩を報ずるなるべし」と。

こゝには二尊の悲心のやるせなさが切々と感じられます。しかもその不思議の願行に目ざめるならば「まことに仏恩を報ずるなるべし」とまうされています。親の大悲を頂戴することが、何よりも親のよろこびであります。仏恩報謝ということは、念仏にあふれ出るまでもなく、本願を領受するそのことが如来の御恩を報ずることであることは、何と有難くも勿体ない事ではありませんか。

仏の大慈悲とは何をあわれみ、かなしみ、ほぐくみたまうのでありましょうか。大悲の涙は一体何にそゝがれてい

うと察するだに気の毒でなりません。

この様子を見て思いました。仏様がなぜ私の迷を破って信心を与えて下さらないのかという人があります。私もかつてそのように思つた事があるのです。その言分には一寸返答に窮します。しかし今、親に抱かれて泣く子供の状況を見ていると、その疑問が解ける思いがするのです。私の胸には何かこみあげて来るものを感じます。いや、私ならば、医師と母とがなせ上手に子供の口を開いて、治療する術を心得ぬのかとも言えましょう。しかしそれは第三者の理屈です。今親と子供の様を見ていると、どうしても母と医師とを責める気にはなりません。たゞ／＼子供の幼い無智の哀れを感じて親と共に泣きたい気持ちに満たされるのです。どうにもならぬこの児をしかも母親は捨て、はおかぬでしょう。子供を抱いてあの母親は今泣いているにちがいない。そして必ず子供の口を開いて治療する日までその涙と努力とを止めないでありましょう。

るのでしょう。大悲は我身一端の欲望のごときものにそゝがれているではありません。それは永遠の無明の輪廻よりこの私の身心を解脱せしめ、真実の国に迎えとらんとする大事にかゝわっているのです。この眞実者の大悲を思うと、現世の欲望にかゝわっているわれわれの視野の如何に狭隘なものであるか、知られます。

では現世の生活と大悲の撰取とは如何に関係するのでしよう。災禍の只中であつて危く難を逸れたとき「仏様のお蔭で」と謝するのを聞くと、さもあろうと察しられます。また瀕死の重病から奇蹟的に恢復した人が、そのよろこびを仏慈の故にと感じるのも自然の感情でしょう。ところが「隣の島は一向駄目であつたのに、自分の島は見事な豊作であつた。これも偏に仏恩でございませう」という人があるとか聞きましたが、こうなるとそれは明らかに感恩の脱線といわねばなりません。

だとすれば前者と後者とはどこに区別があるのでしよう。われわれの警戒すべき点はこゝにあります。両者に相通するものは何かといへば、それは身体的自己を中心とする本能的願望でありましょう。この人間的欲求と仏慈とが混同されると感謝の中心が眩みます。そして大悲が何にそゝがれているかを見失ふことは、われわれの最も深く戒むべきところですが。前者の感謝も人間的願望を中心とするものな



ら、後者とえらぶところなきものとなつてしまひます。大悲の撰取に魂の闇が晴れると、今まで見えなかつたものが見えてきます。もの、取り方、感じ方が変わつて来ます。そして住む天地が一転します。その転じられた自己にそ、がれる大悲を感じる時、現世の利益を正しく知る眼が開かれてくるであります。

南無阿弥陀仏をとなうれば、この世の利益きわもなし、流転輪廻のつみきえて、定業中天のぞこりぬ」と聖人が誦したまうたところには、人間の欲望は影をひそめ、大悲撰取に長養されている恵みを仰いでおられることがよくわかります。感謝の中心はどこへまでも流転輪廻のつみ消えるよろこびに支えられつゝ、それが自から自己の最善にはかわられてゐる感謝につながるのです。

しかし、大悲の撰取によつて現世の開明がもたらされても、それによつて直にこの身、この心が清浄になるのではありません。またしても欲望に引かれ利害に迷ひ、思うまじき愚痴に誘われるのは、われわれの心の本然の姿です。この心こそどこへまでも悲愍して捨てたまわぬ大悲です。冴えわたる秋月をまたしても白雲が来つてさえぎります。しかし、さも月影は汚れません。白雲を透していつも月の所在は輝いています。そしてやがて雲間を出た月影は一入その光を増して、白雲の去来を美しい秋天の景物と

## 凡骨日誌抄(12)

涅槃浄土

本誌の命(いのち)つきるか案じておりましたら、花田先生のおいのちと共に、まだまだ続けさせていただけることまことに有難い欣ばしいことでございます。それにして、この一月から二月にかけて、お世話になつた多くの方々が、故羽溪了諦先生夫人(九三才)安田理深師(八一才)はじめ、この世を去つていかれました。

こうなると、私もすこし真面目に店仕舞いのこと、考えなければならなくなりました。それだけに一日一日がなつかしく、一時間一時間が惜しく、その意味では却つて、生き生きとしてまいりました。そしてそこは夫婦、以心伝心、家内もそのようで、元氣な今のうちにと整理をはじめたようです。尤もそういういいながらも、孫がお嫁をもらう年頃まではと云つてゐるのですから、おかしなものでございませぬ。

しかし、真面目にひそかに思います。子や孫たちへの、

転じゆくでしょう「罪障功德の体となる、氷と水の如くにて、氷おほきに水おほし、障りおほきに徳おほし」まことにこの消息は不思議です。無明煩惱を透し撰めて、いつもはつきりと大悲の月光は輝き渡つてゐるのです。

八木 重吉

ときたま  
「そんなら  
なにがいいんだ」  
とかんがえてみな  
たいていは  
もつたいなくなつてくるのよ

炭のおこる音をききながら  
いろ／＼の考えが無くなつてゆき  
私が悪かつたとおもいつめるたいらかき  
ながい間からだが悪るく  
うつむいて歩いていたら  
夕陽につつまれたひとつの小石がころがつていた

西元 宗助

いや、有縁の人々への最大の遺産は、贈物は、時来りて自然に涅槃浄土に還えらせていただけれること、このことに極まることを。

いよいよ至らぬわが身であることを知らされていませぬ。聖人のお言葉に「虚仮諂偽(こけてんぎ)にして真実の心なし」(教行信証信巻)とありますが、これらの文字をじつと見つめてみると、わが如実相、わたし自身の気づかなかつた我が実相を、よくもお見通しになつたお言葉と、慚愧しながら合掌させられております。

このあいだ、大分の菩提樹の会の方々の集りに参加して、私としては珍らしく、いっぱい機嫌で(そう申してもコップでビールを二杯いただいただけ)喋べりました処、親愛なる禅僧から、今日のお話、さっぱり焦点がない。あちらへ気をくばり、こちらに気をくばり、という意味の感想をズバリと述べられて、わたし、ああ、やっぱりと、恐縮



しながら辞去したことです。その青年僧らに見送られな

ら。「ああ、やっぱり」と申しましたのは、どうも私、まだ  
いろんなことに色気がありすぎ、それに禅宗の方などがお  
られると、そのことに気をつかいすぎて、いよいよ不純な  
のです。でもお蔭で、すこしは目がさめました。

○ 禅僧の警策ビシリ南無阿弥陀

○ ほんとうに不純、不徹底。まことにお恥かしい限りでござ  
います。

花田さん、いや花田先生のこと、気にいたして案じなが  
ら、しかし、ほんとうはわが身だけが可愛くて、それほど  
には案じてはいません。ただ口先だけ、ペン先だけ、慚愧  
の二字に尽きます。甚だ相済まぬことであります。

例によって、榎本栄一さんの詩を終りに紹介させていた  
だく。榎本さん、いつも勝手にすみません。お元気でしよ  
うね。

常不軽礼拝

私しらずしらずに  
頭がたかく

## 生命への畏敬

科学精神の荒廃をおそれる

一七九八年に出版されたマルサスの人口論（初版）には、  
食糧を生産する土地は有限であるが性欲は無限である。食  
糧は算術級的に増大し、やがて窮乏と社会悪が人口を制限  
すると説いている。

実際、今日の南アフリカをはじめ、インド、パキスタン  
その他の途上国においてはマルサスの仮説は半ば的中して  
いるかに見える。しかしこれと対照的な日本や欧米の先進  
諸国では文化とともに物はゆたかになり、生活のレベルは  
向上しつつあるにもかかわらず、出生率は低下する一方で、  
わが国では近く（約三十年後）静止人口状態に入ろうとし  
ている。

その主因は果たして何なのか。おそらく、人口や子孫に  
対する意識の革命、いや根本的な人生観の変質によるもの  
といえないだろうか。

もともと子孫の繁栄、種族の発展は本能的なエネルギー、  
性欲となつて現れるのであるが、現代の若い「文化人」た

軽慢の心わいており

もつたいや 常不軽菩薩

この私をも拝みたもう

この土

この土にうまれて

よろこびをしり

かなしみをしり

苦しをしり

仏恩をしり

（榎本栄一著「難度海―念仏のうた」から。

樹心社刊）



川畑愛義

ちは性の解放やフリー・セックスなどを叫ぶ一方で、子ど  
もを産みながらない。とくに母性本能は父性愛よりも強い  
といわれる中で、女性たちはますます妊娠・出産を回避し  
ようとする傾向がみられる。そして性と産児とを分離して  
ひたすら物質的な文化・末梢（まっしょう）的な幸福を求  
めて育児の労をいとうようになりつつある。しかも彼らは  
これがいかに反自然的、反人間的な思想・行動であるかに  
ついてほとんど反省しないのである。

眼を転じて、さきほど末問題視された試験管ベビーにつ  
いてみるに、これは妊娠のできなかつたイギリスのレスリ  
ー・ブラウンさんの卵子を取り出し、体外（いわゆる試験  
管内）で夫の精子と受精させた後、それを夫人の子宮内に  
送って受胎させ、妊娠に成功したものである。その後イン  
ド人医師も同様な事例を報告しているが、これらが次第に  
エスカレートすれば夫婦の体外受精卵を他の女体をかりて  
の産産を依頼するというホスト・マザーまで発展する危険



性さえはらんでいる。

たといそこまできなくても、今日の荒廃した医学思潮の中で生命の誕生さえいよいよ物質的、機械的、便宜的な考え方の落とし穴にのめり込みそうな気配がしてならない。さらに、遺伝子組みかえの問題、これは生命の誕生、いやそれ以前の原点に対する挑戦とも考えられる。遺伝子、その主体はDNAであるが、そのひねり曲がつたくさりを切り離して別種の遺伝子と結合させることをさしている。これによって、自然発生的には考えられなかった新しい生命を可能にするわけである。その主なねらいはわれわれに都合のよい生物を創造することであるが、ここでは誤って新しい有害、有毒性の微生物が作り出される危険性があるほか、このような考え方が功利的な人種改良や偏見にみちた人間改造にもつながりかねないのである。かつて、ドイツのカイザーは黄色人種をおそれる黄禍論をとまえ、ヒットラーはゲルマンの優秀性を盲信しユダヤ人虐殺をあえてしたことはまた記憶に新しいところである。これらはすべてシュバイツァー博士のとなえた「生命への畏敬(いけい)」の念がうすれた培地から発生した思考錯誤といえよう。

真の文化、現代科学はむしろ生命の尊厳性について純粋に考えなおすところから始まるであろう。

## 中国残留孤児と貿易摩擦

中国に残っている日本人孤児たちの肉親探しのニュースが大きく報じられている。これらの孤児たちのテレビでのインタビューで云っている言葉が胸を打った。「現在の中国人養父母に可愛がられて成長し、今日に至って何不足ないが、どうしても実の親に一目会いたい」という切実な声である。これが本当の我々の気持であろうと思う。孤児たちが親探しに日本に来てテレビなどで紹介された時、あれが自分の子であらうと思っても、期限のぎりぎりまで申し出ない人もあったと聞く。

戦争という異常な状態であったとは云え、我が子を手離さねばならなかった事情が暗い影を投げかけて、なかなか名のり出れないという。まことに戦争では、人間のどうにもならない、いざという時には自分本位にしか考えられない人間の業の姿を、まざまざと見せつけられる思いである。戦後の食糧事情の悪い時では、家庭の中でも何とも云えない悲しい人間関係を体験させられた。戦争とか食糧不足と

ここに、ノーベル賞生理学者アレキシス・カレルの警告が目される。「人間はもう現代の文明の進歩についていけない。その文明が進むほど、人間が退化していくからどうしてもここで一度それが人間にどんな影響を与えているか、人間を幸福にしているか、どうかをつき究める必要がある」と。

人の生の対極の死についても、科学は、医学は不遜(ふそん)であってはならない。安楽死などを語る前にその真義について問い直すべきではないか。

歎異抄に次の一節がある。  
「すべてよろずのことにつけ往生にはかしこき思いを具せずしてただほればれと弥陀の御恩の深重なること常に思いだしまいらすべし。しかれば念仏も申され候、これ自然なり、わが計らわざるを自然と申すなり」

ここに往生とは浄土に往(ゆ)いて生まれること、現世の死についてさすが親鸞はこざかしい人間知をいましめ、仏の慈悲を仰ぐ自然死の大切さを示しているように思う。



山田 幸

いような異常の状態だから、人間がおかしくなるのである。それが果して変るであろうか。平和な世の中では、あの戦争の時の餓鬼の姿が、ただ外見が異って現われるだけのよう

に思える。  
戦後十年と少々経って、始めて欧州の土を踏み二年ばかりドイツで過した時は、ヨーロッパの日本に対する評価はまことに低いもので、我々日本人が卑屈さを感じさせられるような場面がしばしばあった。ところが最近はどうだろうか。アメリカやヨーロッパとの間に貿易摩擦を生じ、大きな外交問題となっている。それは裏を返せば日本の工業生産品が世界的な競争力に勝って、どんどん輸出を続けるためである。昔は新しい技術は輸入するものと決っていた。ところが最近逆の場合が出て来た。日本の技術が世界に輸出され、多くの分野で世界の最高の水準をゆく時代になった。研究の面でも、昔は世界的という言葉が非常に



遠い存在であった。しかし最近では分野によっては日本で活躍していることが、そのまゝ世界的になる時代である。

この頃のヨーロッパ旅行で感ずることは、どこへ行っても日本人がおり、日本の若者は胸を張り、大手を振って闊歩する時代となったことである。まことに隔世の感がある。敗戦に打ちひしげられていた戦後の時代には、将来何時かは世界に伍して行ける日本に復興させなければならぬというような内に秘めた願望が日本人全体にあったように思う。いわば今日はその願いが叶えられた時と云えよう。しかし、このような時代こそ危い時であるという見方もできる。己れが己れがという気持が頂点に達し、自己中心にしか行動できないのに、形だけは皆のためという衣を着ている。社会で一生懸命働いている目的は、結局、権力欲、物欲につながっているのが我々の実態である。人の上に立ちたい、他の国より上になりたい、これはまた何という執念であろうか。念願であった世界に伍してゆけるような日本になってみれば、またそれだけに悩みは尽きない。戦争であれ、平和であれ、何時になっても、己れが己れがの心、自分中心でしかあり得ない姿、この姿をすっかり見通して、そこから抜け出せないでいる我々を、そのまゝ抱き取って下さる仏の大悲、これに気付かせて頂く外はない。学問をすることと身をたてている者にとつて、歎異抄

## 念仏詩抄

聞くこと聞くこと

香師おおせに

“忘れるたびごとに

忘れておくれぬ

お慈悲をおもい出して

念仏すべし”

香師—香樹院徳龍師

今のお念仏が

忘れておくれぬ

お慈悲の証拠——

そのお念仏の

オココロ聞くこと——

お念仏しつつ

オイワレ聞くこと——

聞くこと——

十二節の「あやまて学問して名聞利養のおもいに住するひと、順次の往生いかあらんずらん」という証文もそうらうぞかし」という言葉などまことに耳が痛い。

しかし考えてみれば人間一生、どんなにちやほやされ、名譽と権力をほしいままにして、一生を終っても高が知れている。また、どんなに人に悪く云われ、罵られて一生を終っても、これもまた高が知れている。それは仏の大悲に較べようがないからである。ただ念仏だけが残り、これだけが確かなものである。まさに唯仏是真である。

こんな風に思っている自分にとつてまた歎異抄十三節の本願ばかりについて、「本願にほこるころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにさうらえ」という個所がまことに有難い。無碍の一道という感を頂く言葉である。

お念仏を頂きながらも、我々の考えることは矢張り同じで、ふと「自分がやったら、こうするのだが……」などという妄念が頭をもち上げてくる。何時までたっても真暗な自分である。しかしこの闇夜の中を、念仏の光を頂いて足下を照らし、照らし、して道を歩ませて頂く。ただそれだけである。そこには自然と自分のなすべき道が照らし出されるように思う。

(昭和五十七年三月十日)

## 木村無相

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

帰命の一心

香師おおせに

“おのが心をもつて

名号を信するの

信にあらず

名号に具足する信心が

あらわれたる

帰命の一心なり——”

聖人おおせに







1. 關於... 之... 說明...  
 2. 關於... 之... 說明...  
 3. 關於... 之... 說明...  
 4. 關於... 之... 說明...  
 5. 關於... 之... 說明...  
 6. 關於... 之... 說明...  
 7. 關於... 之... 說明...  
 8. 關於... 之... 說明...  
 9. 關於... 之... 說明...  
 10. 關於... 之... 說明...

1. 關於... 之... 說明...  
 2. 關於... 之... 說明...  
 3. 關於... 之... 說明...  
 4. 關於... 之... 說明...  
 5. 關於... 之... 說明...  
 6. 關於... 之... 說明...  
 7. 關於... 之... 說明...  
 8. 關於... 之... 說明...  
 9. 關於... 之... 說明...  
 10. 關於... 之... 說明...



ミダのおあたえ

よく聞くこころ

ミダのおあたえ

あかちよくなむら

ミダのおあたえ

ああ

ナメアミダフ

ナメアミダフ

香仰お秘

ナメアミダフ

タノメの母の

よのあそ

今ああ

ナメアミダフ

ナメアミダフ

ああ

ああ

月にして、フト「ころんで角力とれ」との近角先生のお言葉が思い浮かび、私の療養の方針がきまった。病は医師まかせと云いながら、内心は、よくして下さるとの甘い願いを持ってのおまかせであったと恥じ、最悪を覚悟の上でのおまかせとなった。

今度の病が縁となって、清沢師近角師の名言をはじめてわが身に頂けているにつけ、永観律師の「病もまた善知識なり」を大きくうなずいている。

### 聖人のうしろ向き姿の御教化

歎異抄の中にある聖人のお言葉を拝していると、親鸞聖人は常に弥陀仏にむかわれて、本願を仰がれての御述べである。常の仰せ「親鸞一人がためなりけり云々」をはじめ「誓願不思議にたすけられまいらせて」また「弥陀の本願まことなれば云々」等々、私共にしては、そうした聖人の後ろ向き姿のお教化を蒙る。そこに私のような反抗心の強い者も反抗が出来ないばかりか、やがて聖人様私もその通りでありますと、わが身に自然にしみてくる。

思えば私の様な我執我慢の強い者には聖人こそ空前絶後のよき人である、同時に国境を越え、時代を貫ぬいて万人の胸に、古くならない新鮮さをもって大きな光を放って下さることを確信する。

### 難行道と易行道

達磨大師が支那に渡来した時、時の皇が仏法を聞きたいと招待された。大師が会場に行かれると一段と高いところに皇の座のあるを見られて、そのまま去って、所謂面壁九年の行に入られた。それというのも官位に執している人には仏法が聞けぬことをあわれまれたからであろう。

さて第二祖慧可禪師は、修業中の大師に法を求めて来られた。大師はまず「法施を求めるには財施は！」と問われた。文字通無一物の慧可は、手を一本切つて差し出すと、「蛆のわくそんなものが何になるか？」大師が大喝されたと、自分の何ものもないのを恥じ、ひれさがると「我汝に大法を授けん」と迎えて第二祖になった。

こうした伝説を聞くにつけて禅のきびしさと六難しさに身震いさせられる。煩惱のかたまりの私共は、あれも知って、これもやっつたと、持物で一杯である。それなのに、そんな磨いてもダイヤの光は出ず、血で血を洗ったのは綺麗にならない。「煩惱具足の身にはいずれの行も及びがたい」ことを見抜かれて、彌陀の本願が成就したのである。親は子に無くてはならぬことのために苦勞される。仏の本願もこのどうして見ようもない身のために成就されて「乗せて苦海を渡しける」と呼びかけられている。

龍樹菩薩は「難行の道は峻しい山河を歩いて越える道で



あるが、本願を信じ念仏申す道は海路を順風を受けて横ざまに越えるので易行である」と、御自身は儂弱怯劣の愚者にかえられて、この身には本願の船に乗せていただくばかりと、卒先されてのお勧めである。

私がかつて一灯園を訪ね、街々で下座を行じた時、形だけは出来ても、内心では高あがりして、われこそはとなっているのを知り、みのるほど頭のさがる稲穂かなであるのに自分のみのりのない白穂をなげいていた時、東山の丸山公園で青息吐息をつきながらベンチに坐っていた時「ここから電車に乗れば京都駅へ行ける、君も早く本願の船に乗り給え」と教えて下さった僧侶の人があった。今なお忘れられぬ。

さて道元禪師が難儀して支那に渡り、如浄禪師のもとで坐禅しても一向に悟れず、寸暇もあると先師の語録を筆写して日本への土産にと願っていた。そこへ先輩が来て「そんな先人のカスを写して何になる。早くこの言葉が云える身になれ」と大喝された。

そうしたある日、隣り合せて坐禅していた支那僧が疲れて居眠りすると、如浄のきびしい声で叱られた。道元はその刹那、自分は居眠りはしてないが何時までも悟れず、共に支那に渡った友人が死んだのに何時までも心が開けぬのは、自分も居眠りしていたと、めざめ、早速仏前に御札を

### 法友からのお見舞

花田法兄

貴誌「慈光」十二月あとがきにて御病氣入院加療中とのこと承り驚きました。一読直ちに悲しみにおそわれました。私自身辛うじて生きられているに過ぎない状況とて、同朋親友を御見舞に出かけられないこと、更に御伺いの手紙さえも進呈出来ないことを歎いているばかりです。

凡そ世間的の見舞ことばでは心が通いませぬ。お会いして眸と眸とが正面に向き合ったとき、更にいうなれば、念仏申しながら手を握りあったならお互いに長寿を誓いあうことができませんようか。

若い時に一読したことのある維摩経が「病状に在る維摩居士の許へ名だたる菩薩方が入りかわり立ちかわり訪れるが文珠にしろ普賢にしろたちどころに逆に撰伏せられてしまふ……と云う」物語がおぼろげ乍ら思い浮かびまして、世に所謂「釈迦に説法」がましい慰安の言葉など軽々とかけられませんかと思われ、ひそかに心の中で法兄命生きていて呉れ給えと念ずるばかりで居りましたところ、このたび二月号あとがき拝見して順調に恢復に向つていらつと御報漸く安堵させられています。南無阿弥陀仏。でも病名が病

しようとした時、如浄師の声、「脱落身心、身心脱落しソモサン」と呼びかけられた時「和上みだりに人を印可することなかれ」と答えると「脱落身心々々々」と喜びながら道元を合掌すると、道元もまた師を合掌して、一味のさとりに入った。

其後帰朝して、深草で数人のお弟子と草屋の中で正坐していた時、お弟子が托鉢して師の草庵を建てようとした時それをことわり、又当時鎌倉の幕府が師を迎えて法座を招待しようとした時、来て説けより何故に求めに來ないのかと辞退して、山深い永平寺に草庵をもうけ、遠来の弟子達と唯坐禅し、古仏もそうせられたのだから、我等もまた只坐あるのみ。と何時もすすめられた。又ここは山が浅い、と云われている。これひとえに法を尊び、法につかえられた生涯であった。

山頭火

生死の中の雪ふりしきる

この旅、果もない旅のつくつくぼうし  
どうしようもないわたしが歩いている  
捨てきれない荷物のおもさまえうしろ

名のこととて只管案じられてなりませぬ。

法兄の命ながらえさせ給えと念願した所で、凡夫自力の愛執に外なりません……。

「念仏まふすのみぞすえとほりたる大慈悲心にてさふらふべき」との聖人の御声が聞こえてきます。聖人の仰せ言拝承してこちらこそ法兄の御教説を拝聴するのが却って道筋だと気づかされて……先月末法兄の「生死を越える道」を読み続けて居ります。成程なるほど頷かされている次第であります。

いよいよわたくしの胸に省みて俱会一処をと念じつつ念仏申させて頂いて居ります。私もこの脳出血が起る前から不整脈（心房細動期外収縮、房室ブロック、右脚ブロック等々）があり情動の影響を最も受け易い病竈を拘えている心身です。

法兄の心筋障害が若しも悪化増悪したりしないようにと只管念じ上げます。何卒良くなつて下さい。

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

花田法兄

二月二十二日

玉尾 延忠

玉案下



## あとがき

お釈迦様の花祭の月がまいました。誕生仏のまわりを草花で飾り、幼い子供達が讃仏歌を高らかに合唱いたしますのはなごやかな光景でございます。

この四号も諸先生や誌友の皆様方の御念力にささえられ、殊に心をこめての御手伝いを頂きまして出させて頂く事が出来ました。たゞ有り難く御礼を申し上げるばかりでございます。

○

近角先生の「煩悶の下に光明あり」、信の道を一筋にあゆまれつつ眼科医を開業された安波医師の御体験、その他諸先生方の玉稿は一ツ／＼この身に泌みて、読ませて頂きました。川畑先生のお原稿は手術で御入院中を医学者の立場に立って、本誌の爲いそぎお書き下さいました。

花田の病気につきましては、皆様方から御ねんごろな御見舞状をたまわりながら一一お礼状をお出し申し上げず、失礼申し上げて居りますこと深く御詫び申し上げます。少しづつ順調でございますがまだ当分入院生活が続くことと存じます。

何卒今後共に御はげましの御心添えをたまわりますよう御願ひ申し上げます。

## おことわり

こ二十日ばかり病気もおさまってきましたが、再発を恐れて、原因の調査をして貰っています。どうか無事であれかしと願っていますが、これからの私の生活も主治医の御指示に随いますが、静居せねばなりませんので、講話は全部休ませていただきます。

「慈光」だけは続けさせて頂きます故何卒よろしく願ひします。

生かされて生くばかりなりみほとけの

ふかき誓のあるにまかせて

三十余年前狭心症発作が続き、名大病院の青山内科で診て貰いました時、心筋障害と診断され「ヒビの入った茶碗も大切にすれば長持ちする」と言われ、草屋に籠居しはじめました時の腰折一つ思い出すままに書きつけました。

(花田 正夫追記)

定価 半年 八〇〇円(送共)  
一年 一六〇〇円(送共)  
編集・発行人 花田 正夫  
電話 八二一七〇三七番  
愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
印刷人 坂部 光雄  
名古屋市南区駈上町二ノ八八  
発行所 慈光社  
振替口座 名古屋一〇四七〇番  
郵便番号 四五七